

4.4 モニタリング調査期間中に発生した東日本大震災後の環境変化

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災によって、東京湾においても津波が来襲し、江戸川放水路内においても早い流れが数往復生じたと考えられた。

地震発生時の東京湾奥部の潮位や流速の観測データを確認したところ、海水面の上昇及び流速の増大が観測されていた。水位は明らかに通常の満潮、干潮とは異なる変動をしていた。また、その時には流速 60cm/s 程度と非常に速い流れが観測され、気象庁発表のデータによると東京湾内でも 1.6m（横須賀）の津波が観測されており、千葉でも 0.9m の津波が観測されている（図 4-6、表 4-4）。

そこで、震災発生から 2 週間後の平成 23 年 3 月 25 日に工事箇所周辺の干潟を踏査し、トビハゼや底質の状況を目視で確認した。

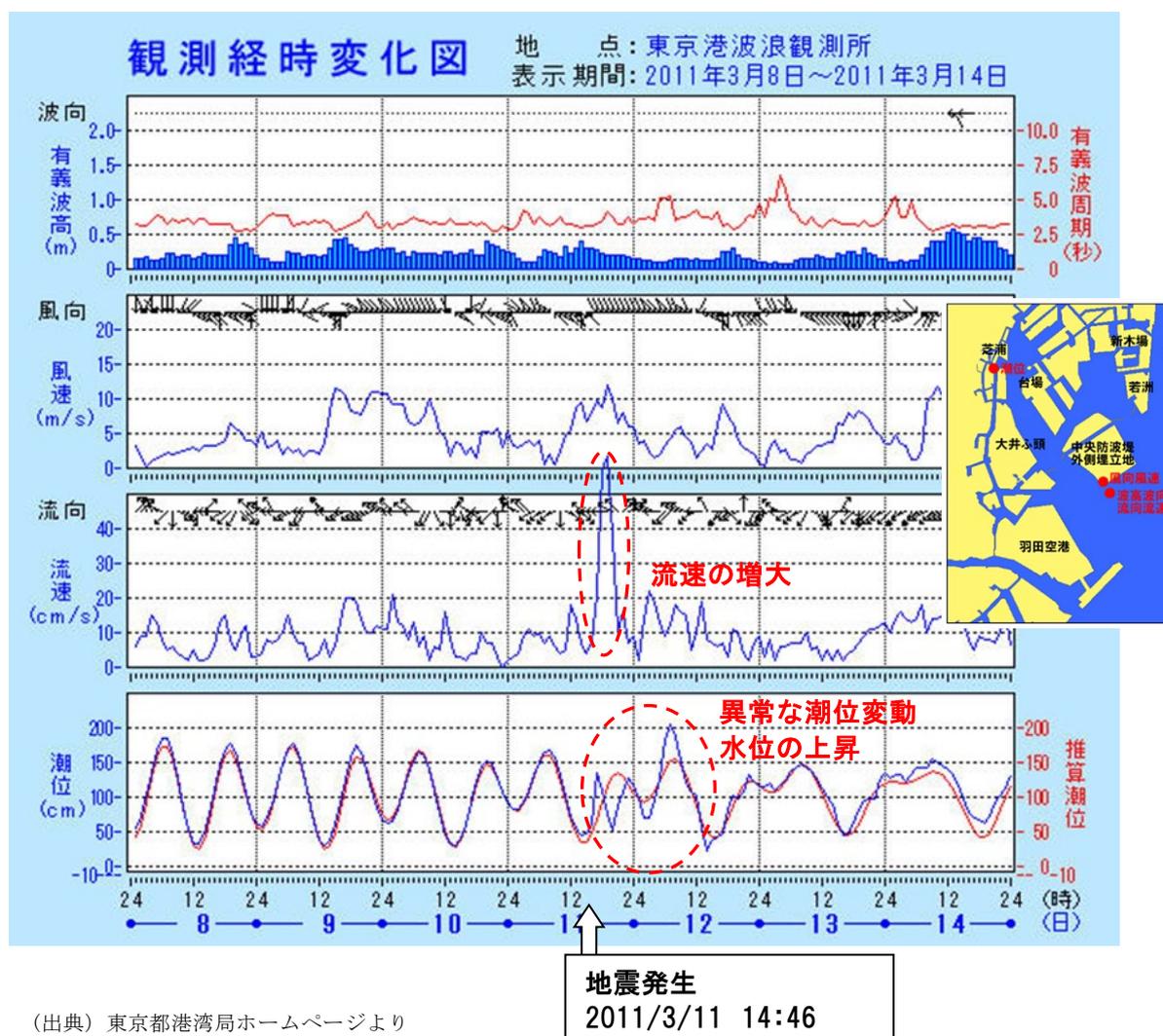


図 4-6 東京灯標における潮位や流速の変化（地震発生前後）

表 4-4 震災時の津波観測状況（平成 23 年 3 月 11 日）

場所	津波の最大波高	
横須賀	11日17時16分	1.6m
横浜	11日17時37分	1.6m
東京晴海	11日19時15分	1.3m
千葉	11日18時18分	0.9m

※波高は気象庁が発表したデータ。気象庁 HP より引用。